
イタズラ男と黒タイツ男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イタズラ男と黒タイツ男

【Nコード】

N8277Z

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

イタズラ好きでドSな男子高校生の隆と、黒タイツ大好きな変態男子高校生の拓馬。

そんな二人につっかかってくる美少女の名波。その名波を影で応援しているファンクラブのメンバー。

登場人物が変な人で固められた学園コメディです。

シリアス？おいしいんですか？

でははじまりはじまりー

黒タイツにかける情熱

「人生ってなんだろう？」
「は？」

教室で授業を受けていたら、いきなり話を振られた黒髪のだるそうな少年・相沢隆。あいさわ たかし

その突拍子もない会話を振ってきた茶髪の明るすぎる少年・木下拓馬。きのした たくま

通路を挟んで席が隣同士の二人は仲が良かった。

「だーかーらー。人生ってなんだろう？」

「別に聞こえなかったわけじゃねーよ。質問があまりに唐突すぎて意味がわかんねえだけだ」

「さいですか。じゃあなんだろう？」

「あー・・・」

めんどくさそうに考え始める隆。なんやかんや言っても友達想いな彼は拓馬の友達であり幼馴染であり大親友です。

「楽しむコトじゃね？」

「その心は？」

「いや、今のが心の部分だけだな。毎日笑って暮らしていければそれはそれで良い人生になりそうじゃん？」

「さすが隆！」

「じゃあ拓馬はどうなんだよ」

「黒タイツかな」

さして迷った様子もなく、軽快かつ大胆に答える。そんな拓馬を見

て隆はため息を漏らす。

木下拓馬は、壮絶な黒タイツフェチなのである。高校2年でもはや女性の足に興味があるのはどうかと思うが、相当な変態である。

「それにしてもいい時代になったもんだよなあ」

そう言つて前のほうをうつとりと見つめる拓馬。

真ん中よりもやや後ろに位置している二人の席から前を見ると、同い年の女子生徒が見える。全然普通の光景ではあるのだが、そこは黒タイツ拓馬である。女子生徒の顔や胸、背中や髪など全てをスルーして、足だけを見定めている。

季節は秋も深まりし11月。自然と女子生徒たちも冬服の上にコートを着たりして防寒対策をし始める季節だ。

しかし腰から下のスカートから伸びている部分は隠しようがない。そこで上からジャージを履いてくる生徒もいるが、大半はタイツである。さらにその大半が黒いタイツを履いている。

拓馬にとっては冬という季節はパラダイスだった。北国パラダイスだった。

そして隆の3つ前の席に座っている黒髪の美少女の女子生徒こそが、拓馬好みの足をもつ生徒だった。

「はあ」

うつとりと眺める拓馬から桃色の吐息が漏れた。その瞬間、見られていた女子生徒がブルっとからだを震わせた。

「拓馬。キモイからやめろ」

「隆にはまだわからないんだな。よし、ちょっと待ってろ」

そう言つてノートにせかせかと何かを書き始める拓馬。

こんな拓馬に慣れている隆は、無視して黒板の文字をノートに書き込んでいく。

授業が終わり、拓馬のもとへと一人の例の女子生徒がツカツカ・・・いや、ズンズンと歩いてきた。

「ちよつと木下！ また変なこと考えてたでしょ！」

「誰がお前の足なんか見て欲情するかよ！」

「うそつけ」

「ちよつと！ 欲情って・・・この変態！」

「だからしてねえって言ってるだろ！ そんなことより隆、これ読んでろ」

隆の小さなツツコミを無視して、女子生徒と拓馬はケンカ腰で会話を始めた。

これもいつものことなので、隆は二人の声をBGMにして拓馬から渡された紙を読み始めた。

「ブハッ！！」

吹き出すのも無理はない。拓馬から渡された紙には、黒タイツの魅力についてが汚い字でびっしりと書かれていた。

ザツクリとななめ読みをしていくと、途中から噂の女子生徒・黒木名波ななみの話になっていた。黒タイツのことを何も知らない人がこの文章から読み始めたら、ラブレターか何かだと思ってしまうような内容だった。

そして最後の一文はこう書かれていた。

『木下拓馬は黒木名波の足を愛してます』

もうこれはダメだと思う。

しかしここで終わらないのが黒タイツ拓馬の親友である隆である。隆はイタズラ好きで有名である。

この前も同じのクラスの男子の一人が生贄となつてしまい、カバンの中がゲームのケースでたくさんになっているという事件が起こった。

中身は空っぽでケースだけが大量に入っていた。それを運悪く先生に見つかってしまったのである。

犯人が名乗り出てこなかったことから、この事件は迷宮入りなってしまったが、クラスの生徒たちは皆、犯人が隆であることが分かっていた。

なんやかんやで、皆も変わったことが好きなので、先生の犯人探しに手伝うようなことはせずに『小さいおっさんじゃね?』とか『さつきゲーム会社の人に来てたよ』とか適当なことを言っていた。

この事件を『ゲームケース混入事件』と名付けられてクラス内で処理された。

しかしカバンに入れられた生徒だけが先生に呼び出されてしまったのは内緒。

そんな隆が今回思いついたイタズラ。

「黒木。これやるよ」

「え? なにこれ?」

「あああああああああああああああああ!」

隆が渡したのはもちろん拓馬から受け取った紙である。

問答無用で渡す隆。それを絶対死守しようとして教室を揺らす勢いで大声を上げた拓馬。

今二人の戦いが幕を開ける。・・・わけもなく、あっさりと名波へ

と紙が渡ってしまった。

隆 WIN

隆のパーフェクト勝利であつた。

「・・・相変わらず黒タイツ好きね。・・・ってなんですとおおおおおお！？」

きつと最後の文を目にしたであろう名波が、美少女の異名からは想像できないような大音量の声が教室に響いた。

全力全開で真っ赤になる名波。それを見てしてやったりの表情をしている隆。隣の席で顔を逸らして口笛を吹いている拓馬。

今日も世界は平和である。

黒タイツにかける情熱（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

さて新作です。

初めて読んでいただいた方は初めまして。前回から読んでいただいている方はまたよろしく願いいたします。

前作とは全く違う感じ（？）で今回もコメディ（笑）を始めていきます。

では次回もお楽しみに！

仲良し三人組

「あ、あんた、私のこと、すすす、す、好きって、ど、どういふことだよ！」

どもりまくりの囁きまくりで聞きづらかったが、美少女女子高生の名波は顔を真っ赤にして拓馬に聞いた。

聞かれた本人は彼女の間違いに気がついていたので、慌てて訂正に入る。

「おいバカ。ちゃんと読んでみる。俺はお前の足が好きだけで、お前のこと自体は特になんとも思っていないわ」

ここだけ聞くとただの照れ隠しにしか聞こえないが、木下拓馬は筋金入りの変態である。

彼を見ても呆れた表情でただ訂正しているだけといった感じである。しかし名波のほうは頭が混乱してしまっている。これだけの美少女でありながら、中身はとても純粋な女の子である。同じクラスの変態だと思っていた男子から急に告白まがいのことを言われたら、それはもう頭の中が真っ白にはなるし、動揺しているもしてしまう。何をどうしたいのかよくわからない状態に陥っていた。

そんな二人の対照的な表情を見て隆はとても幸せだった。

「拓馬。黒木、聞こえてないぞ？」

「え？ うわっ！ ホントだ！ おい、目を覚ますんだ！」

何をどうしたらこうなるのかわからなかったが、名波は頭から煙を出さんばかりのショートを起こしていた。

そんな名波の両肩を拓馬が掴んで前後に揺らす。

ぐわんぐわんと首が動いて、外れていたネジが戻ってきたらしく名波が戻ってくる。

「・・・はっ！ 気安く触らないでよ、変態！」

正気を取り戻した名波がビシバシと拓馬を叩いて離れる。

「なんなんだよ。相変わらず意味不明な女だな」

「意味がわからないのは木下でしょ」

「どこがわからないっていうんだよ」

「そうだな。拓馬の頭は単純だ。主に黒タイツのことしか考えてない」

「そこが変なのよ！」

若干ヒステリックになりつつある名波。

確かに正論だった。そんな黒タイツのことばかり考えている高校生はどう見ても変だ。

しかしそんな罵倒も真の変態である拓馬には全く通用しなかった。

「変ってなんだ！ 人の趣味をとにかく言わないでいただきたい！」

紳士な姿勢で挑む拓馬。まさに変態と言う名の紳士である。

「ねえ、相沢あ、助けてえ」

間延びした声で少し涙を浮かべた目で、隆を見上げるように助けを求める名波。

隆は拓馬と違って、美少女のそんな姿を見てなんとも思わないわけではない。

黒木名波は学校中を探し歩いても見つからないくらいの抜群の美少

女だ。そんな美少女が自分に助けを求めてきている。もの凄い幸せな状態だった。

「黒木」

「何？」

自分の名前を呼ばれて、ついにやってきた助け舟に目を輝かせる。

「耐えろ」

「そんなことだろうとは思ってたよ！」

しかしやってきた助け舟は海賊船だった。

相沢隆はイタズラ好きであると同時に、『かわいい子が悔しがる表情が大好き』という性癖を持っている。

つまりところ本質はDSなのであった。

めんどくさがりでイタズラ好きでDSな隆と、変態紳士で黒タイツ大好きな拓馬。

そんな二人にからかわれているような名波。

周りから見ているとただの仲良し3人組なのだが、現状は名波がいじられているだけなのである。

しかし名波も名波で何度も二人にちょっかいを出しに行っているの
で、二人の中では『黒木M説』が浮上しつつあった。

隆の中では『いじられてもめげない美少女』、拓馬の中では『黒タイツの似合う美少女』という扱いになっていた。

言い方はアレだが、性的に繋がっている関係だった。

「もういいわよ！ あんたたちに声をかけた私が悪かったのよ！」

「「なんで怒ってるんだ？」」

隆と拓馬が名波に対して同時に言った。

「怒ってないわよ！　いつも通りですよー！」

キンコンカーンコン

チャイムという名のコングが鳴って短い休み時間の闘いが幕を閉じた。

仲良し三人組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

毎日投稿は無理でした！てへべろ（＾q＾）

次回もお楽しみに！

ストーキング オン ストーキング

学業という学生の仕事が終わりに、意気揚々と帰っている生徒の群れの中で、たった一人だけ浮かない顔をしている生徒がいた。もちろん変態の拓馬である。

「あーあ。学校の授業が24時間授業ならいいのになー」
「それだと寝る時間が無いだろ」

隣を歩くのは拓馬の大親友でお馴染みの隆。いつものように適当に拓馬との会話のキャッチボールに付き合う。
拓馬は学校が終わるといつもこんな感じである。
理由はもちろん・・・

「一日中黒木の黒タイツを履いた足を見ていたい！」
「大声で言っな。気持ち悪いだろ」

とのこと。

「隆くん。そこは気持ち悪いじゃなくて迷惑になるーとかだろ？」
「いや、気持ち悪いし。お前が変態発言するときは、大抵赤の他人のフリしてるから俺は迷惑じゃないし。良かったな、こんなにお前のことを心配してくれる友達はいないぞ？」
「おお！ さすが隆くん！ そうやって遠まわしに人のことをバカにするのは良くないぞ」

なんかかんやと盛り上がっている二人の後ろから一つの影が見ていた。

「私の名前が出てきたから誰かと思って追いかけてみたら、またあいつら・・・」

電柱の影からストーキングするように見ているのは、我らがアイドル黒木名波でした。

実はその後ろには数人があとを付けていたりするのは、また別の話。

「うーん・・・この距離じゃ何話してるのか聞こえない・・・」

若干遠い距離感を保っている名波は、二人の会話が聞こえていないことに少し苛立ちを覚えていた。

そんなイライラを解決する方法は簡単である。二人の会話に混ざればいいのだ。

しかし名波もそんなことは分かっていた。それができないからイライラしているのだ。

もしもこのまま二人の会話に混ざってしまえば、今日の休み時間の時のように弄ばれるのは目に見えている。

しかし気になる。どうしようもないパラドックスに名波は困り果てていた。

しゃがんだ体勢で隠れている電柱から身を現し、次の電柱へと移動しようとした。

その時！

前を歩いていた二人が突然後ろを振り返って全力疾走でこちらに向かってきた。

突然の事態に驚いた名波は身動き一つ出来ずに、立ち上がろうとした中腰の姿勢のままで固まってしまった。

全力疾走してきた二人は名波の脇の下から手をつっ込み、持ち上げるようにして立ち上がらせた。

「ちょ、ちよっと！どこ触ってるのよ！」

「はいストーカー逮捕ー」

「はいはい大人しくしてねー」

隆、拓馬の順でそれぞれ警官の真似をしながらニヤリと笑う。

名波のストーキングはバレバレでした。

二人は名波が電柱から出てきたところを捕獲する算段を立てながら歩いていたのです。

「君ねー。ストーカーは立派な犯罪だよ？」

「現行犯だから言い訳はできないからな」

「私ストーカーなんかじゃないし！」

「みんな最初はそうやって言っただよ」

「本人たちに了承を得ないであとを付けているのはストーキングではないと？ 困りましたな、相沢警部」

「そうですね。本人に自覚が無いのは困りますな、木下警部」

互いを警部と呼び合う二人。

木下警部は携帯を取り出して、無線で何かと話しているフリをする。その間も名波を拘束している手を放すことは無い。

「ちょっと！いい加減に離してよ！あんたらがどこ触ってるかわか
つてるの？」

「二の腕」

「脇」

拓馬、隆の順で答える。

「そうじゃないでしょ！女子高生のからだをさわってんのよ！この
状態だけ見たら逮捕されるのはどっちよ！」

名波を左右両側から、『宇宙人確保』というような感じで持ち上げているため、どうみても名波が怪しい二人組に連れて行かれそうになっっている状態だった。

しかし当の本人たちは全くあんなことやそんなことをするつもりはないので、恥ずかしさややらしさなどを垣間見せることすらなかった。しかも名波が暴れすぎているせいで周りを歩く生徒たちも『仲良しな三人組だ』と呟きながら通り過ぎていく。

「これだから素人は困るよ」

「・・・どういうことよ」

空いている手で頭をかきながら拓馬が言う。

「俺たちはお前をストーキングしている奴らがいるから、こうしてお前のところに走ってきてやったんだぞ」

「え？」

名波はここで初めて自分がストーキングされていたことを知った。実は三人が通っている学校には『黒木名波ファンクラブ』なるものが設立していた。その話は別の機会にゆっくりと。

そして今回ストーキングをしていたのは、その中でも熱狂的な名波ファンのメンバーであった。

「もしかしてお前気づいてなかったのか？」

「う、うん」

「そうか。少しは感謝する気になったか？」

まさか自分がストーキングされていたとは露知らず、二人をストーキングしていたとは・・・

二人に助けられて少し見直した名波。

「黒木。木下。二人ともありがと。ちょっと二人の印象が変わったわ」

そう微笑んでお礼を言う名波。

二人も少し微笑んで、名波の腕を掴んだまま、からだの周りをぐるりと回転してからだを前後180度回転させた。

なんでぐるりと回ったのか分からない名波。

そしてさっきの微笑みよりも少し悪意のこもった微笑みを見せる拓馬と隆。

そして名波のからだをグイッと持ち上げてゆっくりと前進。

徐々に上がっていくスピード。

「え、ちょっと、どこ行くの？」

なんとなく分かっているながらも名波が二人に問う。

しかし返事は返ってこず、スピードがまた少し上がる。

美少女と呼ばれる名波のからだは見た目通り軽いので、男子高校生二人なら簡単に運べてしまう重さだった。

「ぎゃあああああ!!」

さらに笑顔になり、小走りだったスピードを駆け足のスピードまで上げる。

もちろん向かっているのはファンクラブのストーキング部隊の皆様のところ。

ストーキング部隊のみなさんは、二人の微笑みに恐怖を感じてすでに退避を始めていて、集団で固まって逃げている。

それを追っている二人と、半泣きの状態で二人に持ち上げられている名波。足が宙に浮かび上がるくらいまで持ち上げられているので

どうしようもない。

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

ついに笑い出した二人。しかしスピードを緩めることなく、辺りには名波の悲鳴と二人の悪魔のような笑い声が響きわたっていた。

その追いかけてこは二人の足に名波の宙に浮いた足が絡みついて、三人が派手に転倒するまで繰り返されたとか何とか。

ストーキング オン ストーキング（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

順調です。

黒木名波ファンクラブについてはまたの機会に。

次回もお楽しみに！

黒木名波ファンクラブ

「それでは会長、お願いします」

ここは北海道某所にある黒木名波ファンクラブ本部。とある1LDKのマンションの一室にその本部はある。

部屋の中には9人の会員と呼ばれる男達が、行儀良く3×3で整列して三角座りで座っていた。その整列している男たちの前には、女性が一、男が二人立っている。

その中の女性に会長と呼ばれた男の一人が、全員の前に立って話し始める。

「えー、本日皆に集まって貰ったのは他でもない。まずはこれを見せてくれ」

そう言うのと、もう一人の男が持っていたiPadを指さす。そこには今日の学校帰りにファンクラブの会員が撮影したであろう映像が流れ始めた。

一通り流れ終わると、会長が話を再開する。

「今見てもらったのは、今日の学校帰りに名波姫を尾行していた会員が、例の二人組によって捕獲されてしまった名波姫とともに追いかけられたのを、この幹部が撮影したものである」

幹部と呼ばれた女性は小さく頭を下げた。

「君はこの映像を見てどう思う？」

「滑稽だと思います！」

質問を振られた会員の一人が素早く元気に答える。

「そうだな。普通ならば尾行がバレた彼らをそう思うかもしれない。しかしここで注目すべきは名波姫の表情だ！」

力強く握り締めた拳を天井へと掲げる。

「名波姫の表情を見てみる！ 今にも泣きそうではないか！ これは我々の母性本能・・・いや父性本能をくすぐられはしないか？」

「たしかに・・・」

「これはそそる！」

「守ってあげたい！」

「泣いたらダメだー！」

会長が指摘すると、会員達が口々に声を上げる。

この『黒木名波ファンクラブ』とは、名波がいつも拓馬と隆にいじめられていることをきっかけに発足されたもので、名波の可愛らしく愛嬌のある笑顔や美しい表情を守りたいが一心で集まった会員によって構成されており、構成員は、会長、幹部・男女各1名、会員・9名の計12人からなるものである。もちろん全員が名波や拓馬、隆と同じ高校の人間である。

主な活動としては、名波を遠くから観察し、名波に近づく害敵を近づけさせないようにすることである。

しかし、名波に寄ってくるものは対処できるのだが、名波本人から近づいていってしまったている拓馬と隆の二人には、ファンクラブのメンバーも頭を悩ませていた。

そんな時に起こった今日会員の数名が襲われるという事件。

たまたまその現場に居合わせた女性幹部が撮影していたので、それを題材にして話し合いの場を設けたのであった。

「さて、ここからが本題だが、この二人に関して何か得策がある者はいないか？」

「・・・はい」

そう問いかけると、会員の一人がおずおずと手を挙げた。

「その二人に何か名波姫に近づかないようにと警告をするのはどうでしょうか？」

「警告か・・・」

普段ファンクラブのメンバーが害敵を近づけさせないようにする方法としては、近づこうとしている人間に声をかけて近づくタイミングをなくしたり、名波の近くで立ち話をして自分たちのからだでバリケードを作ったりしている。主に『さりげなく』することが基本だった。

「しかし警告をしてしまうと、もしかしたら二人から名波姫の耳に入ることがあるのではないか？」

「でもこの状況は明らかに異常だ！」

「このままでは名波姫がかわいそうだ」

「早く手を打つべきだ」

「いやここは慎重に・・・」

会員達があーでもないこーでもない議論を始めた。その様子をじつくりと眺める会長。

その会長に男性幹部が小声で話かける。

「どう思いますか、会長」

「たしかに警告をするのもいい案だと思う。しかし我らのモットーである『清く正しく裏方に』を破ってしまうことになるのは避けた

い」

「つまり警告をするのには反対ということですか？」

うむ、と頷く会長。そのことを男性幹部が議論でヒートアップしている会員に伝える。

少しガツカリする最初に警告の案をだした会員派数名と『当たり前だ』と言わんばかりに胸を張っている数名の会員。残りの他の会員はどちらとも言えないような気持ちだったらしい。

会長と幹部達同様、会員達もこの二人のことをなんとかしないといけないことは重々分かつている。

しかし具体策がないのだ。どうしたらいいのかということとで皆が日夜頭を悩ませている。

そして訪れる沈黙。こんな時は天使が近くを通っている瞬間らしい。

「会長。ここは一つ、私の考えを聞いてもらってもいいですか？」

そう言っただけで天使ごと沈黙を切り裂いたのは女性幹部だった。

男性幹部は、ファンクラブ創設者である会長と共に創設したこともあり幹部という立場にいるが、この女性幹部は、唯一の女性会員でありながら名波を思う気持ちが半端なく強いことと、名波に一番近い存在ということもあって、幹部として他の会員よりも上の立場に立っている。つまり実力で幹部になったのである。

「どんな案だ？ 言ってみろ」

「それはですね・・・ここによごーによごーによ・・・と言う作戦です」

他の会員たちにも聞こえるように説明する。

「ふむ」

「それは良い作戦だ！」

「さすが女幹部！」

「そこにシビれる懂れる！」

「考えることが違うぜ！」

大声で女性幹部を褒め称える会員達。

その瞬間。

ドンッ！！

「うるせえぞ！ 静かにしろっ！」

あまりに騒ぎすぎてしまったためにお隣さんから壁を叩かれた上に、壁の向こうから罵声まで浴びせられてしまった。

全員が静まり返った。

こんな状況でも天使は通るのだろうか？

「では明日女幹部の作戦を実行に移す。今日はこれで解散だ」

会長がそう言うと、また騒いで怒られないように、静かに行動して部屋を出ていく会員と幹部達。

そして部屋には会長ただ一人になる。

部屋の主である会長こと吉永春樹は、まだ見たことのないお隣さんに恐怖を抱きながら、コップに冷蔵庫から出したお茶を静かに注いで喉を潤した。

そして冷静になった春樹は心の中で考える。

『なんかさつきは勢いでイける！ とか思っちゃったけど、女幹部の作戦・・・失敗しそудな』

春樹は二人の関係と名波の関係を思い出しながらそう思った。

ファンクラブ会長は意外と冷静で気弱な人間でした。

黒木名波ファンクラブ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が半端なく高まります。

今回はファンクラブの話でした。

実は三人と同じクラスの会員もいるのですが、それは秘密集団なので誰が会員なのかはわかりません。

名波姫を護るはファンクラブの使命！

では次回もお楽しみに！

イタズラの代償

名波を拓馬と持ち上げて走った翌朝。

隆は両腕筋肉痛という緊急事態に陥っていた。二の腕はもちろん、手首から肘にかけての前腕も痛かった。

箸をもつのが痛い。

カバンを持つために腕を曲げ伸ばしするときの動作が痛い。

よっこらせと椅子に座るときにする腕の動作が痛い。

それよりなにより一番辛かったのが、歯磨きだ。

あの時間だけは本当に苦痛だった。我が家にお口クチュクチュモンダミンが無いことをあんなに悔しく思った日はなかった。

教室に入るなり、隆が自分の席で大人しく座っていたら、拓馬の能天気な声が聞こえてきた。

「隆くん！ おはようございますー！」

拓馬は元気よく挨拶すると、駆け寄ってきた勢いそのままに隆に飛びつく。

隆は飛びついてきた拓馬を条件反射のごとく横に叩き落とす。

後ろの机を巻き込んで派手に倒れる拓馬。叩いた拍子に筋肉痛で苦痛の表情を浮かべる隆。

「何で叩くんだよ。危ないじゃないか」

「お前の頭の中だけで十分犯罪級なのに、行動まで危なくなるじゃねえよ。こちとら筋肉痛と朝からタイマン張ってんだ」

「筋肉痛？」

「昨日黒木担いで走ったじゃん。あれが両腕に響いてて痛いんだ・・・」

やつと痛みが引いてきたらしく、深呼吸をして呼吸を整える隆。

「そんなに痛いのか？」

自分の席に座って軽い口調でそう言つと、隆の腕に触ろうと手を伸ばす。しかし触る前に隆の右手にその手を払われてしまう。その瞬間、再び激痛が隆の右手に走る。

痛がつている隆を見て笑いながら拓馬が一言。

「俺の右手が疼いているー！　って感じだな」

「疼いてるんじゃないくて暴れてるんだよ！　大暴走だよ！　・・・
つてお前は筋肉痛とかになつてないのか？」

「だって俺は鍛えてるもん。あのくらいじゃへこたれないぜ！」
「それもそうか」

そう言つて力こぶを作るポーズをしてみせる拓馬。

175CMぐらいと同じような身長 of 二人は、隆が顔は整っているが草食系男子さながらのヒョロ男であるのに対し、拓馬は笑顔に定評がありそうな痩せマッチョな体型をしている。

二人とも正対な外見だが、黙つて心を無にしていればそれなりにモテるはずだ。しかしいかんせん性格がアレなのでモテ路線からは外れていた。

「それでもさすがに最後コケた時の衝撃は痛かったかな」

「あれは痛かったな。黒木のやつが両足使つてまで止めに来るとは思わなかった」

「俺なんか膝と肩に青たん出来てるもん」

「そういう意味では俺は無傷だな。そっちの痛みはすぐに引いたし」
「代わりに筋肉痛が残ったと」

「そういうこと」

結果痛み分けということだ。

その時、二人の前に昨日の出来事で不服全開の美少女が現れた。

「よう。そんなムスつとした顔でどうしたんだよ。せつかくの美少女の称号が逃げてくぞ」

「今日も安定の黒タイツだな。そんなに怒るなって。昨日も散々謝ったじゃん」

二人の挨拶が聞こえているのかどうかわからないほど、ムスーッと頬を膨らませて『私は怒っています！』という雰囲気を全開にしている名波。それもまた可愛いのは内緒。

その二人に返事の代わりに自分の左手を見せる。そしてその左手に巻かれていた包帯をクルクルとほどいてみせた。

「うわぁ・・・」

「マジでか・・・」

二人が引いているのも無理はない。

名波の手には包帯が巻かれていた。厚さから見てギプスが入っていないのは一目瞭然で捻挫とか骨折でないことはわかる。

問題はその包帯の中身だった。

名波のキメ細やかで綺麗だった手には大小様々な傷が付いていた。

中には正方形の絆創膏が貼ってある部分もあった。

この傷はもちろん転んだ時にできたもので、からだを庇うために左手を出したところ、傷を左手が全部引き受けてしまった形になった。不幸中の幸いだが、骨折とか大きなケガはなく、ケガらしいケガはこの左手の傷だけだった。

「これどうしてくれるのよ」

真剣に怒っている様子の名波。そんな表情を見せられた二人は互いの顔を見合ってアイコンタクトをとる。

「悪かった。これホントに俺たちの責任だ」

「そうだな。今度からは気をつけるよ」

「わかった。許してあげるわ。・・・なんて言うと思ったら大間違いよ！」

フン、と鼻で笑い、不敵な笑みを浮かべて二人を見下ろす名波。

「だいたいね、いつも私のことバカにしすぎなのよ！ 今日は今までの分も償ってもらうからね！ 精神的ダメージと肉体的ダメージを負ってるんだから、断ることはできないからね！」

心底嫌そうな顔を浮かべる隆と、この状況から少しでも逃避するために名波の黒タイツを見て精神統一を図っている拓馬。そして今日こそは仕返しの大チャンスとばかりに大きな態度を取っている名波。

「で、何をしたらいいんだ？」

「今日一日、私の言うことを聞くんというのはどう？」

隆の質問に名波が答える。

「一部の人はご褒美と思うかもしれないが、俺は嫌だ」

「ダメダメ。もうお願いは始まつてるのよ？ 断る権利はありませーん」

楽しそうに笑っている名波。いつもの立場と逆転している状況が楽しくない隆。まだ逃避から戻って来ない拓馬。

「お前はいつまで見てるんだ！」
「いでっ！」

名波の右手に頭を叩かれて戻ってくる拓馬。

さてはて、今日一日どんな一日になるのやら。

イタズラの代償（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると発狂します。

筋肉痛の恐怖。

では次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦ミッシヨンスタート

こうして一日奴隷として名波に従うことになった隆と拓馬。

そんな事態になっているとは露知らず、『黒木名波ファンクラブ』の女性幹部である竹中^{たけなか}有紀^{ゆき}は、例の作戦を実行に移そうとしていた。作戦の概要はこうだ。

ファーストステップ

第一段階

名波が一人のところを狙い、幹部である有紀自らが話しかけに行く。そして名波を有紀の家に招待する。

セカンドステップ

第二段階

うまく家に連れ込むことができたら自分の性癖を暴露する。そこでショックを受けるであろう名波に有紀が愛の告白。

サードステップ

第三段階

同情心から名波は有紀と交際を始める。
しばらくしないうちに有紀が『あの二人苦手だからあんまり関わりたくない』と名波に告げる。

ファイナルステップ

最終段階

その後名波は有紀のお願いということもあり、二人を避けるようになる。

もともと二人のほうからはあまり近づかないので、名波がからかわれることもない。

そして女同士であるため男が近寄ることもない。さらに名波は笑顔を取り戻し万々歳！

有紀は少し地味な印象を受ける長い黒髪を、うなじ辺りで両側に二

つくくり前に垂らしている。

本体である黒縁のメガネをクイッと持ち上げながら、作戦の概要が書かれた紙を自分の席で読み返して、ニヤニヤとしそうな表情筋を必死で押さえつける有紀。

ファンクラブの会員達も賛同してくれたので、いつもより100倍の勇気を持っていた。

昨日、家に帰ると会長から『やはりあの作戦は危険が大きい』という内容のメールが送られてきたが、今の有紀にはどんな優秀なブレ―キもただの『ひのきのぼう』と化していた。

そのぐらい自信がある作戦だった。

先程の作戦概要を見てもらうとわかる通り、この竹中有紀は友達としてではなく、一人の人間として黒木名波を愛している。

同じクラスになってから色々と裏で手を回し、席替えの度に名波の隣になるように工作をしていた。

そんな努力のおかげもあってか、今ではファンクラブの幹部にまで上り詰めてしまった。愛ゆえの結果であった。

そしてついに名波に自分の想いを伝える『オペレーション・リリイ』（命名・有紀）を遂行することが決まった。

少しドキドキしてはいるものの、作戦が失敗する様が思い浮かばない有紀。

いつもよりも少し早起きして鼻パックもしたし、自分なら必ず成功できる。むしろ他の人に成功して欲しくない。

「よし。朝のホームルーム始めるぞー。席につけー」

そう考えていると、担任の先生がガラガラとドアを開けて入ってきたので、慌てて紙を机の中にしまう。

「有紀ちゃんおはよ」

「お、おはようございます」

笑顔で左隣の席に座る美少女が自分に挨拶してくれた。
今日の作戦の成功率が少し上がった気がした。

そして放課後。

ついに約7時間の沈黙を打ち破って、女性幹部竹中有紀が行動を開始する。

一日の授業が終わると隣の席の名波に声をかける。

「ねえ、名波ちゃん。よかったら今日うちに来ない？」

昨日の夜から自室にある大きな熊の人形を相手に何度も練習していた言葉だ。完璧だった。

「え？ 有紀ちゃんち？ うーん・・・今日はちょっと用事があるんだよねえ・・・」

「用事？」

エマージェンシー！エマージェンシー！

まさかの予定有りに内心戸惑う有紀。

「うん。今日はこのあと木下と相沢に色々と奢ってもらったんだ」

ここでも邪魔をしてくる木下・相沢ペア。

少しくじけそうになりながらも、なんとか心の状態を整え直す。
しかしあの二人と用事があったとは考えもなかったので、言葉が出てこない。嫌な汗が背中を一筋流れた。

「もしかしてあの二人と付き合ってるの？」

「へ？」

やっと声を出したと思ったたら変なことを聞いてしまい、頭の中で後悔する有紀。

その質問に名波はキョトンとしている。

「おい、黒木。人を待たせておいて自分はおしゃべりか」

「うるさいわね。今日は私がメインなんだから私に合わせなさいよ」

教室の後ろから歩いてきた隆が名波に声をかける。その隣に拓馬の姿はない。

「あれ？ 木下は？」

「あいつはトイレに走っていった」

そんな会話を聞きながら有紀は頭の中で作戦の練り直しをしていた。

「行くんならさっさと行くぞ」

「今有紀ちゃんと話してるんだから待っててよ」

「じゃあ竹中も連れていくか？」

まさかの隆からの誘いに、作戦の練り直しをしていた有紀が顔を上げる。

願ったり叶ったりの大チャンスである。これならまだ作戦成功はありえる。

そう考えた有紀は、できるだけ嬉しそうにしないように注意しながら言う。

「・・・私も行っているの？」

「まあ黒木がいいならだけどな」

「あんたと違って心が狭くないのよ。じゃあ有紀ちゃんも行こっか」

笑顔で誘う名波。その顔に一瞬だけ固まる有紀。トイレから戻ってきて一人増えたことに驚きながらも、その相手が黒タイツを履いていたので即座にOKをする拓馬。

そして誰にも気づかれないようにニヤリと口角を上げる隆であった。

女性幹部の作戦ミッシヨンスター（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると前転して喜びます。

ついにやってきた女性幹部の一世一代をかけたこの作戦！
果たして結末はいかに！

そして隆の謎の笑みの理由とは？

というわけで次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦、邪魔する者とされる者

放課後。

名波、有紀、拓馬、隆の四人は学校近く的大型ショッピングストアに来ていた。

ここには食品などが売っているスーパーはもちろん、服屋、小物屋、フードコート、占い屋などありとあらゆる店が揃っていて、夕方のこの時間は学校帰りの高校生や放課後デートを楽しむカップル、夜ごはんの買出しに来た近所のおばちゃん、一人暮らしのサラリーマンなど、様々な年齢性別の人間が集まっている。その建物内に四人も入り込む。

「なあ黒木ー。奢るって言ったけど、あんまり高いのはやめてくれないよ?」

高校生の財力なめんなよ? とばかりに弱気な発言をするのは変態紳士の拓馬。ここに到着するまでに、5回以上は財布の中身を確認している。

「大丈夫よ。おやつになりそうなものを奢ってもらおうと思ってるだけだから、そんなに高いものはねだらないから」

「・・・なんか優しい黒木って気持ち悪いな」

「木下には手加減しないことに決めた」

「すみませんでした!!」

隆が『友達も誘えばいいさ』と言ってくれたことに少し機嫌を良くしたのか、奴隷の拓馬に少しばかり優しくしているのは、左手を包帯で固めた美少女名波。ここに到着するまでに、3回以上は『相沢も少しいいところがあるんだね』と言っている。

そんな名波に道中何回も言われた隆が口を開く。

「拓馬。お前はもう大人しく黒タイツでも見てろ。これ以上奢る金額が増えたらたまらん」

「へーい」

「あの、私も来て良かったんですか？」

そう隆に言うのは、黒髪の女子高生の有紀である。

有紀はなんとなく作戦の延長でここまで付いてきてしまったが、冷静になって考えると、家に誘うのを違う日にずらせばよかっただけのような気がしていた。

それにどこかで例の作戦の紙を無くしてしまったらしく、さっきからカバンをちよくちよく探しているが見つからない。机の中にいたままなのかもしれない。それが有紀の作戦への不安を加速させていた。

しかもここにいと、相沢と木下に借りを作ってしまうような気がして地味に苦痛だった。

そんな有紀の気持ちを知ってか知らずか隆は、問題ないさ、と言う。

「黒木の友達なんだろう？ 別に一緒に来たって変じゃないだろ。それに俺と拓馬は黒木の奴隷なんだ。断って奢る金額が増えても困る。お互い得をしてるんだから気にするな」

小さく微笑む隆。いつもとは少し違う隆の一面を垣間見た気がして一瞬きゅんとしてしまった有紀だが、相沢は敵だと認識し直すことでなんとか平常心をキープする。

名波のほうに向かって隆が問いかける。

「ところで俺たちは何を奢らされるんだ？」

「ちよっと落ち着きなさいよ。たしかあの辺に・・・あった！」

名波の視線の先には、クレープ屋があった。

それが目に入るなり、小さい子のように楽しそうに走っていく名波。健全と走りゆく美しい黒タイツに目を奪われる拓馬。

健全な笑顔で走っていく名波に見とれる有紀。

そんな二人を見ながらポケットの中をこそそそとしている隆。

「みんなー！ 何してんのー？ 早く奢ってよー！」

「はいはい。なんだあいつ。かなりご機嫌じゃないか・・・」

拓馬が少し悔しそうにつぶやく。それを聞いていた隆が拓馬に近寄って何か耳元で囁く。

隆が拓馬のポケットに何かを入れて離れると、拓馬が不思議そうな表情を浮かべる。

このイタズラ男、また何かよからぬことを考えている様子。

「ちょっと！ 早く来てよ！」

「ほら姫様のご立腹だ」

「はいはい。今行きますよーっと」

二人が歩いて名波のところへと向かうのを見て、あとを追うように有紀も名波の元へと向かった。

「んー！ おいひい！」

「姫様。お気に召しましたかな？」

「満足じゃ！」

美味しそうにクレープを頬張る名波。

四人がけのテーブルに座っている。名波の向かいに拓馬、有紀の向かいに隆がそれぞれ座っている。

実際、あれだけのことを毎日毎日させられて、クレープ一つで許されてしまう関係とはどうなのだろうか。

そんなことを考えていると、最終的には『黒木M説』へとたどり着いてしまう拓馬であった。

「あの、私も奢ってもらって良かったですか？」

有紀が申し訳なさそうに、自分の向かいに座る隆に聞く。

有紀自信はクレープを食べる気はなかったのだが、隆がせっかくだからと奢ったのだ。

「細かいことは気にするな。そんなことよりもなんで敬語なんだよ。同じクラスの黒木と友達なんだから俺達にもタメ口で話したっていいと思うぞ？」

「おっ！ 今日の相沢はなんかいつもと違うねえ！ ついに良心が芽生えてきたのかな？」

クレープを食べてご機嫌なお姫様は、いつもと違って良心の塊である隆に感心していた。

その隆の横で拓馬は、先ほど隆がポケットに入れた紙を見ていた。

あの時、隆が拓馬に耳打ちした内容はこうである。

『面白いものを拾った。あとで隙を見て読んでみる』

隆が良心全開で話している今がチャンスと思い読んでみた。

そこに書かれていたのは『オペレーション・リライ』と命名された謎の作戦の概要が書かれたものであり、そこにはなにやら自分たちの名前も書いてあった。

少し驚きながらも軽く内容がわかる程度に目を通した拓馬は、それをポケットに入れ直してから隆を見る。

待ってましたとばかりに視線を合わせてきた隆は、チラリと有紀のほうを見る。

拓馬は、なるほど、と心の中で呟く。

隆と拓馬の付き合いは長いため、隆のチラリだけで全てを理解するには十分だった。

作戦のことなんかすっかり忘れているであろう有紀に襲いかかるイタズラ男の魔の手。

果たしてどうなってしまうのか。

続く。

女性幹部の作戦、邪魔する者とされる者、（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

次回はイタズラ男のターンです。

というわけで次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦／筒抜けの作戦／

今日最後の授業が終わった時、言われていたとおりに黒木の元へと向かうために腰を上げる隆。

拓馬は我慢していたトイレへと教室を飛び出していったので今は居ない。

隆にとって今日はヒドイ一日だった。

名波が喉が乾いたと言えば自販機まで行かされ、消しゴム忘れたと言えば自分の消しゴムを貸したりと、女王さながらの傲慢っぷりに隆はストレスの塊と化していた。

それに加えて、今はもう落ち着いてきている筋肉痛が拍車をかけるように隆を攻撃していた。

いつか絶対に仕返ししてやる、と内心ではドSの炎を燃やし、必死にヘーこらしていた。

そして残すところ放課後イベントだけになったので、なんとか意識を平常に保って乗り越えようとしていた。

そして黒木のほうに向おうと視線を動かしたとき、拓馬の机の下に一枚の紙が滑り込んできたのが見えた。拓馬が落とした紙かと思いい拾い上げて見ると、拓馬の汚い字とは全然違う女の子らしい文字で書かれていた。

「ん？ 誰のだ？」

拓馬の前の席を見ると誰も居なかった。

帰るの早すぎだろ、と思いながらその前の席を見ると、そいつもいなかった。

残るは更に前、拓馬の3つ前の席、名波の席の通路を挟んだ隣の席の人物のものだと判明（仮）した。

たしか名前は・・・と思い出しながら隆は持っていた紙を見る。

そこには『オペレーション・リライ』と書かれた作戦の概要が記されてあった。

目を通してみると、昨日のストーキング集団の幹部が名波のことを誘惑・・・というよりも告白して成功して～というような内容だった。

「よかつたらうちに来ない？」

そんな時にふと耳にそんなセリフが聞こえてきた。

紙から顔を上げて、声の主を探すと、さっきの名波の横の席の女子であることに気づいた隆は、持っていた紙の内容を思い出す。

そして全てを繋げる。

ここで今日一日の名波へのストレスを晴らすためと、昨日の一連の出来事に対する完全な八つ当たりに向けて、隆は自分のイタズラスイッチを全力でONにした。

普段からイタズラ心を忘れないようにしている隆は、作戦を考えるのに1秒もかからない。8割閃きだ。残りは1割がぬかりなく手を回すことで、もう1割はニヤつかないように表情筋の制御に回す。

『オペレーション・リライ』などと言ってはいるが、イタズラの口である隆から見ると、その作戦は穴だらけだった。

まず第一に家に誘うことから始めなければいけないのがよくわからなかった。

学校の誰も居ないところで言えばいいじゃないか。そう隆は思った。たくさんある作戦の穴を頭の中で挙げながら、自分のプランを考えている。

そして決まった作戦はこうだ。

- 一、家に行かせないようにする。
- 二、一緒に放課後行動をさせる。
- 三、いつもとは少し違う自分を見せて警戒心を解く。

四、黒木とは別々で帰らせる。

五、ファンクラブのメンバーを聞き出す。

こんな感じ。

ざっくりとこの作戦が決まるまで約0・7秒。そして行動に移そうと足を踏み出すまで約1秒。

さすがイタズラのプロは考えるスピードが違いますね。

ここだけ見ると、好きな女の子を取られまいとする男の子のようですが、そこはDＳの隆。あんな美少女で自分のＳ心をくすぐってくるのに、嫌な顔をしながらもめげずに何度も立ち上がってくる逸材を手放したくないと思つての行動です。

もしもあの変な作戦通りに事が進んだら、隆にとってはせっかく手に入れたおもちゃを取り上げられてしまうようなものなのです。

ちなみに作戦の五は実行する気はなかった。聞けたらラッキーぐらいに思つて一応作戦に入れていた。

そして今。

クレープを食べ終わつた段階で、作戦の一～三までは順調にクリアしており、拓馬への手回しも完了している。

いつも以上に気を使う状況だが、達成した時の清々しさを考えるとニヤニヤを抑えている表情筋にも力が入った。

「このあとはどうするんだ？」

「私はもうクレープ奢ってもらっちゃったから満足したし・・・帰る？」

拓馬の質問に名波が答える。

「そうだな。これ以上ここに居て金を使わされても困るしな」

「ヒドイ！ 私ってそんな女に見られてるの？」

「今日の態度を見てたらそう思わずにはいられないだろうが」

「そうだそうだ！」

隆の言葉に拓馬も乗ってくる。

こういうところで黒タイツに惹かれずに、友達を選んで援護してくれるところが拓馬の良いところだと隆は考えている。

「はいはい。じゃあ今日はこれでお開きにしましょうか」

「えーと・・・黒木は俺たちと同じ方向なんだけど、竹中は？」

「あ、私はバスだからこっち・・・かな」

いつもと違う隆に少し緊張してしまった有紀は、すっかり作戦のことを忘れてこの場を楽しんでしまっていた。最初に比べて口数は多くなったものの、それでもまだ慣れていない感があった。

しかしそんな有紀に話しかけた隆は、これで警戒心が解けただろうと思った。

「そっか。じゃあまた明日ね。有紀ちゃん」

「うん、また明日」

バイバイと手を振る四人。

有紀と別れた三人は電車に乗るため駅へと向かって歩いていった。

「今日は二人ともありがとね。クレープとか奢ってもらっちゃったし」

「俺は黒タイツを見るための見学料だと思っていたから問題は無い！」

「木下はどこまで変態なんだ」

「明日からまた地獄が待っているから覚悟しておけよ」
「それは勘弁してください」

穏やかじゃない冗談を隆が言うと、笑いながら頭を下げる名波。
きつとこういう人当たりの良さというかそんな感じのところも、美少女たる所以なのかもしれない。

「それにしても寒いね」

自分のからだを抱きしめながら名波が言う。

季節は11月。

その夕方ともなれば結構寒くなってくる時間帯である。

「そうだなー」

「ねえ！ 二人の上着貸してよ！」

そう言つて無邪気に笑い、二人の真ん中に割り込んで入りそれぞれ
の腕に自分の腕を絡める名波。

普通の男子高校生ならば、名波の可愛さに撃ち落とされているだろ
うが、そこは拓馬と隆である。

「触るな。誰が上着なんか貸すか」

「逆立ちして黒タイツが上にきたら黒タイツに上着を貸してやる。
お前には貸さん」

「ちよっ！痛いし！」

そう言つて互いの距離を詰めて名波を二人の間から押し出す。

「もうイジワルなんだから！」

口ではそういうものの、とても笑顔で二人を風よけにしながら後ろに付いて歩いていく。

三人は今日も仲良しだった。

女性幹部の作戦く筒抜けの作戦く（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回で有紀の作戦編が終了です。

次回からはまた日常コメディ（笑）に戻ります。

というわけで次回もお楽しみに！

体育の時間

「くらえ！ バーニングショット！」

「甘いぜ！ グレートマウンテン！」

「ちよっ！ すごい山って！」

今は体育の時間。男子と女子が体育館を半分に仕切って授業中です。男子は体育の先生が風邪を引いてしまったために、自習という名の自由時間となっています。自由時間とはいえども、やる内容は決まっているので『バドミントン』か『卓球』を選択して、時間を潰さなければなりません。

そんな中、拓馬と隆はバドミントンを選択して、ネット越しに打ち合っていました。

普通にやるのでは面白くないという拓馬の意見で、技名をつけながら打つという縛りバドミントんに興じています。

「いえーい。これで5対3な」

「お前の技名のセンスが無さすぎて相手にならねえし」

互いに未経験だが実力だけで言えば隆のほう为上だった。しかし拓馬のネーミングセンスに笑わされっぱなしでまさかの五角。拓馬のほうは笑いもせずに平然と打ち返してくるので、この縛りは隆に圧倒的に不利だった。

「人のセンスにケチつけるなよな」

「つつこまずにはいられねえんだよ。なんだよグレートマウンテンって」

「ほら、風林火山みたいな感じでかつこよくね？」

「意味不明だし。ほら続けるぞ」

「はいよー。ワンダフルサーブ！」

拓馬のアンダーサーブでラリーが始まった。

一方その頃、女子はバスケの試合中でした。今は名波率いるAチームと、有紀が率いるBチームの試合です。

名波が華麗（笑）なドリブルを披露してジャンプシュート。特にバスケ経験があるわけでもなく運動神経が格段いいわけでもないのに、ゴールまで届かずに見事にゴール下を守っていた敵にナイスパス。

「くそっ！ 惜しい！」

それでも一生懸命悔しがる名波に、自由時間すらサボって女子の試合を見ていた男子は、思わずニンマリしています。

その中で地味に活躍していたのが有紀でした。小学校の頃にミニバスをしていたので、部活をやっている人間には劣るけれども、体育の授業レベルならかなりの活躍。

相手チームに名波姫がいるけれども、今輝かずしてどこで輝くのさ！と言わんばかりの性能の違いを発揮してます。

そして華麗にレイアップシュート。見事ゴール。

有紀が男子のほうをチラリと見ると、拓馬の打ったシャトルを爆笑しながらもなんとか返す隆の姿。

思わず昨日の楽しかった時間を思い出して顔がニヤける。

何を隠そう、有紀は隆に好意を持っていたのです。昨日の良心全開の隆の顔が、有紀の知っている隆の顔とあまりに違って優しかったので、ついギャップにやられてしまったのです。ギャップって怖いですね。

「有紀ちゃん？ どうしたのばーっとして・・・大丈夫？」

「え、あ、名波姫・・・じゃなくて名波ちゃん！」

「姫？」

「いや、なんでもない！ 大丈夫！」

そう返事をして、試合に戻る有紀。姫と呼ばれたことに変な感じを覚えながらも、真面目な名波は試合に集中した。

そして爆笑の渦に巻き込まれた二人の男子。

ついに拓馬が隆の笑いにつられるように笑い始めた。

「なんなんだよ！ さ、さっきから変な名前ばかりつけやがってヒヒヒ」

「だから真剣も真剣、超真剣だって何度も、ヒヒヒッ」

「ヒヒヒ、疲れてきたな。そろそろやめね？」

「だな。腹筋が割れそう」

「もう割れてるくせに」

「何故知っているんだ！」

バカなことを言いながら、男子と女子の境目にあるネットのところまで歩いていき、二人で並んで座る。

ちなみに隆は体育の授業とはいえども、授業中は至って真面目なのでDSを現さない。そして拓馬は、体育の授業だと女子はジャージを履いているので全く興味関心が無い。

したがって、他の動物園の檻にしがみついて女子のほうを見ている男子達とは違い、女子側に背を向けて男子側を向いて座っている。

「いやー、今日の一番は隆の『デリシヤスワンダフル』かな」

「俺はお前が言った『麦茶アタック』が一番ツボった」

互いの健闘を称え合っていると、後ろから近づく人物がいた。もちろん有紀である。え？名波じゃないよ？

「相沢くん」

「え？」

後ろから声をかけられた隆は思わず振り返る。そこには試合を終えた有紀が立っていた。

「竹中か。何かあった？」

「えーっとね、見ててくれた？」

「ん？ 何を？」

モジモジしながら言う有紀に隆は意味がわからないという風に聞いた。

「さっきバスケの試合で大活躍だったんだけど、みてくれたかと思つて・・・」

「あーごめん。見てないや。バドミントンしてた」

「あれ？ そ、そっか。普通そうだよー」

明らかに落ち込む有紀。さっきまでとても輝いていたのに、輝いただけで終わってしまった。

まるで天気が悪いときにやってきた流星群のような気分だった。

そんな残念な気分を引きずったままズルズルと他のBチームの仲間の元へと戻ってきた。

『昨日は優しかったと思つただけどなあ・・・』

頭の中でそう呟いてみると、隆への熱が少し冷めた気がした。

そんなことを考えながら、試合中のAチームとCチームの試合を見る。そこで一生懸命に頑張る名波の姿を見て気がついた。

いくらミスしても笑顔を振りまく名波。味方が点数を決めると自分のことのように喜んでくれる名波。そして可愛い顔。少し小柄だけ

ど美人ともとれるような容姿。どこをとっても及第点がなかった。

『やっぱり私には名波姫しかない！ 名波姫が大好きだー！ 結婚してくれー！』

所詮男は男だ。名波相手には勝負にすらならなかったのだ。

名波への想いと気持ちを再確認することができた体育の時間だった。

体育の時間（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

体育の授業の自由時間って微妙に微妙ですね

次回もお楽しみに！

美少女の間違い探し

「さみー」

「この時期の体育の授業の後って気持ち悪いぐらい寒いな」

「だよなー。しかも今日みたいに汗かいちゃうと余計に寒い」

拓馬と隆は、小走りで暖房が点いている教室へと急いでいた。

廊下は暖房が点いていないので外よりはマシだがかなり寒かった。窓の外は猛吹雪です。

いそいそと教室に戻ってきた二人は自分の席に座るなりカバンの中をガサゴソと漁っていた。

「よっしゃ！ これで冬の寒さを凌げるぜ！」

そう言っただけで拓馬が取り出したのはカイロだった。

袋の中に鉄粉や吸水剤、活性炭、バーミキュライトなどが入っていて、それをシャカシャカと振って空気に触れ合わせることで酸化発熱を起こす際に発生する熱を利用した、皆さんもご存知の小型暖房道具ですね。

拓馬はそれをシャカシャカと振ると顔や手に当てて、ふへー、と声をもらした。

「くそっ！ カイロ切らしてた！」

すごい悔しそうに言う隆。たかがカイロの一つや二つでグチグチ言うのはみっともないですね。

手を擦り合わせてハーッと息をかけて暖まろうとする隆と、カイロで又クヌクヌしている拓馬。

だんだんと教室に他の生徒が戻り始めた頃、名波と有紀が仲良く教

室に戻ってきた。

「あつたかーい」

「私はまだ暑いかも」

有紀、名波の順で入ってくる。さっきまでバスケの試合で華麗なステップ（笑）を披露していた名波は、ブレザーの制服のシャツをつまんでパフパフと涼んでいる。

「うわっ！ 何あんたら、キモイ」

「キモイとはなんだ」

一人は真剣な目で手を擦って、もう一人はのほほんとした目でカイロちゃんと戯れている。

「あ？ お前誰だよ」

手を擦りながらもちゃんと返答した隆に対して、拓馬は名波に聞いた。

ポカンとする名波と有紀。

誰かと聞かれればそれは黒木名波と竹中有紀以外の誰でも無い。

「誰って・・・私？」

自分のことを指さして聞き返す名波。その様子を見て、隆が声をかけた。

「実はな・・・さっきの体育の授業の時、頭を打ってしまったんだ。それでなんともないと思っていたんだが、この様子だと黒木のことを忘れてしまったみたいだな」

「は？ 何言ってるの？」

「冗談だと思ってるのか？ なら本人に聞いてみるか？」

そう言うとき、カイロで又ク又クしている拓馬に、一歩近寄り声をかける。

「拓馬」

「どした？」

「こいつ誰かわかるか？」

「・・・しらん」

「えっ！ ちよつと嘘でしょ！？」

「ちなみにこつちは？」

「竹中だろ。変なこと聞くなよ」

「いやいやいやいや！ なんで私だけわからないのっ？」

拓馬の肩を掴んで前後に振る名波。

その後ろでちよつと深刻そうに見守る有紀。

そして笑いを堪えている隆。

そんな隆の表情を見て、名波が反撃に出る。

「わかった！ またあんた達がグルで私のことからかかってるんですよ！」

そう言い放つと、プンスカと怒って自分の席のほうに歩いていった。また。

残った有紀が隆に聞く。

「木下君、大丈夫なの？」

「うーん・・・全然大丈夫だぞ」

「本当に名波ひ・・・名波ちゃんのことわからないの？」

有紀がすっかり姫と呼びそうになったのに隆が反応して、有紀にバレないように必死に笑いをこらえる。

「わからないってゆーか・・・ヒントは間違い探しだな」

「間違い探し？」

「いつもの黒木と今日の黒木が違うところはどこだ」

クイズの出題者となった隆は、わからないといった顔をする有紀に出題した。

じつと名波を観察する有紀。見れば見るほど可愛い。愛でたくなる。めんこい。

いろいろな気持ちが入かんでくるが、それらを制御しながら思考を巡らせる。

可愛い顔。いつも通り。

微妙に膨らんだ胸元。いつも通り。

少し小柄なからだ。私好み。

スラリとした綺麗な生足。舐めたい。

いくら考えてもわからなかった。というよりも邪念ばかりが浮かんできてそれどころではなかった。

表面上は『わかりませーん』な表情でも、心の中は『ムフフ』な気持ちで一杯な有紀。この女もかなりの変態ですね。

そんな有紀を見ながら心の中で隆は思った。

『そういえばこいつは黒木大好き変態バカだったな。気づかないか』

「どうかしたの？」

並んで立っていた二人に声をかけたのは吉永春樹よしなが はるきだった。

その声に振り向いた隆。有紀は依然名波をガン見したままだ。

「・・・誰？」

「あ、僕、吉永です。竹中さんの部活の先輩なんだ」

隆達2年生の一つ上の3年生の春樹は簡単に自己紹介をした。

なんで3年生がこんなところに、と隆が思っていると春樹が答える。

「竹中さんに用があっただけど・・・これってどういう状態なの？」

「こいつが黒木っていうあそこの女子のことを忘れてしまったっていう話をしたとこです」

「ん？ ということ？」

簡単に説明する隆。それを聞いて納得した顔をする春樹。

「要は間違い探しなんでしょ？」

「まあそうですね・・・」

今日初めて見たであろう名波の間違い探しをさせたところで、わかるわけがないと思っている隆。

しかしこの吉永春樹と言う男、ただものではないがそんなことを隆が知る由もなかった。

ここで有紀が背後に誰か立っているのに気づいたらしく振り向く。

そこに立っていた春樹が視界に入ると同時に、さっきまでの邪念が吹き飛んだかのように驚いた表情を浮かべる。

「吉永先輩？ な、なんでこんなところにつ？」

「竹中さん。今日の部活のことで話があったんだけど、今大丈夫だった？」

「だ、大丈夫ですっ」

「じゃあちよっとうこうか」

そう言つて教室を出ていく春樹と有紀。

残された隆はなんとなく拓馬の頭を叩いてから席についた。

美少女の間違い探し（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかあれば書いていただけると大変喜びます。

ついに彼が日常に出現しました。

もちろん彼が誰だか覚えてますよね？・・・覚えてますよ・・・ね
??

次回もお楽しみに！

変態紳士の判別方法

その日の放課後。

授業が終わるなり、カバンも持たずに名波が拓馬の席の前に立った。

「ねえ木下。本当に私のことわからないの？」

「おお黒木。わからないって何が？」

「いや何がつて・・・ほら、私のこと知らないって言うてたじゃん」
「そんなこと言ったか？」

「だって今だつて・・・」

ふとおかしなことに気づく名波。目の前の拓馬は頭にハテナを浮かべている。

「あ、あれ？なんであんた私と話してるのよ」

「なんでつて・・・お前が話しかけてきたからだろうが」

「もう・・・なんなのよ！」

「いてえな！　なんで叩くんだよ！」

いきなり拓馬の頭をべしつと叩く名波。

それもそのはず。体育の授業のあとはあんな状態だったのに、今は何事も無かったかのように自分と話してはいないか。

そのことが気になって、授業も上の空で拓馬のことを考えていた。
『もしかしたら本当に記憶が？』とか『もしかしたらまた相沢の仕業？』とかいろいろ考えていた自分がバカみたいに思えてきた。

「相沢！　どういうことなのよ！」

そして怒りの矛先は隆に向かった。やれやれといった様子で答える

隆。

「どうしたもこうしたも、こいつは根っからの変態だぞ?」

「そんなこと周知の事実じゃない」

「おい黒木! それは言い過ぎじゃないかつ?」

「そうかもしれない。ところでお前が拓馬と初めて話したのはいつごろだった?」

「えーと・・・確か9月の終わりぐらいかな?」

拓馬と隆が名波と今のような関係になったのは夏も終わり、肌寒くなり始めた9月の終わりぐらいだった。

変態爆発の時期を迎えた拓馬が浮かれ始める時期だった。

そんな拓馬を見て、隆は秋の始まりを感じた。そんな時、教室に入って拓馬の変態リーダーが一人の女子生徒の足を捉えた。

拓馬は全然女子の名前を覚えてなかったの、その時はまだ名波の名前を知らなかった。

それから少ししてから名波の名前を知ることにはなるのだが、それまでは『素晴らしき黒タイツの人』と覚えていた。

つまり何が言いたいのかというと、拓馬は変態である。そして黒タイツ中心で回っていたので、黒タイツが無い名波などただの人ではないのだ。

先ほどまで体育の授業で暑かったために黒タイツを履いていなかった名波のことを、拓馬は『名波』と判別できなかったのである。とんだ変態だ。

「・・・というわけで、黒タイツを履いてないお前が悪い」

「ええー! それって私が悪いの?」

「まあ原因はお前にあるんだからお前のせいだろ」

どうも納得がいけない名波。とりあえず隣に座っている拓馬の頭をベシッともう一回叩いておく。

「なんだよ！　なんでそんなに皆してポカポカ叩くかな！　これ以上おかしくなったらどうするんだよ！」

「あ、自覚はあったのね」

「落ち着け。叩いて直してるんだ。感謝しろ」

好き放題に言う二人に納得がいけない様子の拓馬。
そんな拓馬を見て名波がつぶやく。

「もしかして私って春になったら忘れられちゃうの？」

「ずっと入てればいいじゃん。俺はそっちのほうがいいと思うよ」

「誰があんたの性癖のために履くもんですか。それにこれって地味にあつたかいんだからね。冬ならともかく春に履いてたら足が蒸れて仕方ないわよ」

「そこは我慢しろよ」

「あんたが我慢しなさい」

また頭を叩く名波。ポコスカと頭を叩いている名波だが、実は本当に忘れられたのかと思ってちよつと寂しかったのだ。

でもこうやって覚えていてくれたことが嬉しいわけであつて、この『叩く』という行為は照れ隠しの行為なのだ。可愛いやつめ。

「こうして黒木は拓馬のために春でも夏でも季節を問わずに黒タイツを履き続けるのであった」

「何勝手にナレーションしてるのよ」

さりげなくナレーションを入れる隆にちゃんとつつこむ名波。

「で、実際どうするんだ？」

「これ履いてないと気づいてもらえないって、地味に怖いわね」
「確かに恐怖を感じるよな」

拓馬の変態っぷりに恐怖を抱く隆と名波。おそろべし変態。

「まあなんとかなるんじゃないか？」

「・・・ホントにそう思ってるの？」

「少なくとも俺は覚えててやるよ」

「相沢・・・」

少し意外な言葉にキュンとする名波。

「『拓馬につきまとう変な美少女』って感じでいいか？」

「変な覚え方はやめてもらえないでしょうか？」

その頃異様に静かだった拓馬は何をしているのかというと、二人の会話を聞きながら、カイロをハサミで開封していた。

よいこはマネしちゃダメだぞ！

変態紳士の判別方法（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

前のほうをいろいろと手直ししました。
内容は変わってませんのでご安心を

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8277z/>

イタズラ男と黒タイツ男

2012年1月4日15時54分発行